

鉄の原料を運ぶ鉄道もあつた？

北海道を豊かにするために、ものを運ぶ道路や鉄道、港を整備する必要がありました。まずは石炭を運ぶために空知と小樽が鉄道で結ばれ、やがて空知と室蘭の間にも鉄道ができました。昭和初期から10年代にかけて、室蘭に近い鉱山から鉄の原料である「鉄鉱石」を運ぶ鉄道もできました。



◆有珠山の噴火で中断した鉄道計画。

室蘭に日本製鋼所ができるのと、室蘭から伊達、虻田、真狩を通って倶知安へつながる胆振鉄道の計画がはじまりました。倶知安周辺の鉱山から、鉄の原料「鉄鉱石」を運ぶためです。ところが、有珠山の噴火があり、計画は中断され、室蘭から長万部へと走る「長輪線」が先に完成しました。

◆鉄鉱石を運ぶための胆振線とは？

室蘭の製鉄所で使う鉄鉱石を運ぶための「胆縦貫鉄道」は、まず倶知安と京極が結ばれ、京極から喜茂別まで鉄道がのび、やっと長輪線（室蘭〜長万部）の伊達紋別までつながり、短い

もっと知りたい！「鉄道―胆振線のあと」

胆振線が走っていたまちには、鉄鉱石を運んでいた蒸気機関車や鉄道のあとが残っています。野外博物館として、そのあとをめぐってみましょう。

昭和新山鉄橋遺構公園(壮瞥町)と「平成ふるさとの道公園」(伊達市大滝区)

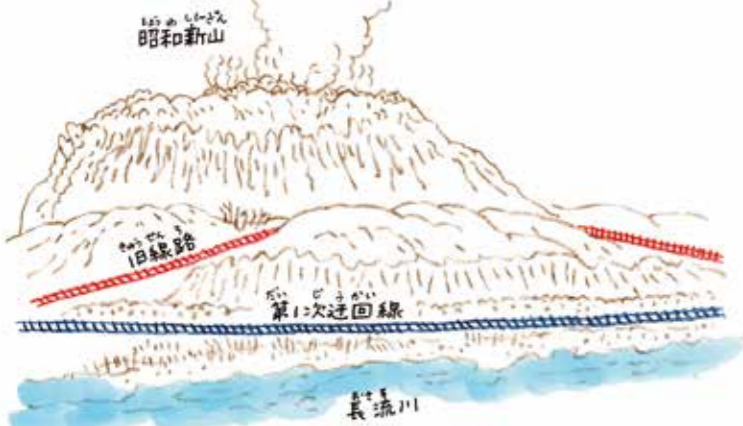
昭和新山のふもとに、胆振線の鉄橋あとが残っています。これは、火山活動によって地面といっしょに鉄橋も持ち上げられたあかして、国道から階段100段ほど上がった高台にあります。また、旧大滝村にあった徳隣瞥鉱山からも、室蘭で使う鉄鉱石を運んでいました。現在、駅や線路あと地は「平成ふるさとの道公園」としてサイクリングロードとなり、近くには高さ10mほどある橋のあとが残っています。



距離と時間で鉄鉱石を運べるようになりました。1944(昭和19)年、国鉄「胆振線」となり、1986(昭和61)年になくなりました。

◆昭和新山が大きくなたびに移動した鉄道。

胆振線が通っていた洞爺湖付近は、昔から火山活動がくりかえされていた地域です。昭和新山は、もともと畑だったところが、火山活動により地面が少しずつ盛り上がり、1944(昭和19)年に誕生した山です。そのすぐ横を走っていた胆振線は、大地が盛り上がるたびに、何度も長流川の方へ移動しなければなりませんでした。



サイクリングロードになっている胆振線の線路あと(伊達市)